3月2日(日)

令和七年度　社会人特別選考（Ⅱ期）入学試験問題

神道文化学部

小論文

―注意事項―

1　問題は3ページ、解答用紙は1枚である。

2　解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。

3　試験時間は90分である。

P24A

問　次の文章を四〇〇字程度に要約したうえで、人の誕生と神との関係について、自身の考えを六〇〇字程度で述べ、全体で一〇〇〇字程度になるように記しなさい。

日本人が永い間語り伝えてきた昔話の数はきわめて多く、その内容も豊富である。その中でもたいへんユニークなモチーフをもつ話として知られる、「産神問答」という名で一括される昔話がある。

そのモチーフの主要な点は、およそ人間というのは、誕生した時点で、一生の運命が定められているのだという、なかばあきらめの気持によって語られた傾向があるようだが、要するに人間に対しては測り難い超自然的な力が働き、神の意志によって出生時に赤子の運命が予知されるのだというものである。

類話を一つあげてみよう。

昔あるところに、一人の大工がおり、村にいても仕事がないので、奥州の方に旅かせぎに出かけた。仕事が終わって、村へ帰る途中、日も暮れたので、仕方なく、近くの村のお宮に泊まることにした。夜中ごろ、パカパカと馬の足音がして、ほかの神様が、村のお宮の神様を迎えにきた。そしてつぎのように言った。「八幡さま、この村の百姓の家に、今夜産屋ができて、子どもが生まれるのでやってきた。お前さまも一緒に行こう」。村の氏神である八幡様はこう答えた。「それはご苦労様だ。オレも出かけたいところだが、ちょうど今夜、不意の客があって、お守りしなければならない。どうかお前さんよろしくお願いします」。この問答を大工は夢うつつに聞いていた。そして自分がお宮に泊まっていると、ちゃんと神様が守ってくれているのだと安心して眠っていた。しばらくすると、また馬の足音が聞こえてきた。神の声で「八幡様、お産もとどこおりなく済んで、いま戻ってきました」「それはご苦労様。で、男が生まれたか、女が生まれたか」「それは女の子だった」「その女の子の因縁はどうか」「その因縁は、今夜のお前さんの宿り人と夫婦だ」。この神々の問答を聞いた大工は、はたと当惑してしまった。自分はいま二十三歳だが、今夜生まれた女の子と夫婦になるなんて、あと二十年たたなければ嫁を貰えないことになる。そこで考えた末、生まれた女の子を殺そうと決意した。

夜が明けるのを待って、村へ下りてきてお産のあった家を訪ねてみたが、とても赤ん坊を殺す気にはなれない。しかたなくまた近くの村で一か月ばかり働いてから、赤ん坊の家に行ってみた。女の子は大きくなりチグラに入れられていて、家人も見当らない。そこで持っていたノミで、赤ん坊ののどを突き刺し、後をも見ずに逃げ去った。

さてそれから二十年経過したが、大工にはどうも嫁の縁がなくいまだに独身だった。ところが、とうとう気に入った女と出会い、嫁に貰った。

ある日、嫁ののどをよく見ると傷痕がある。どうしたのかとたずねると、女は、実は親から聞いた話だが、生まれて一月たった時、どこの何者かが分からないが、のどをノミで突いて逃げた者がいる、といった。その時の傷痕であることを知った大工は、女房が、あの夜神々の問答にあった通りの女の子であることを知って、ひそかに驚き入ったという。

この話は、新潟県北蒲原郡加治川村で採集されたものであるが、運定め譚の一つで、全国的に類話が多いとされているものだ。口承文芸研究の分野では、これを「夫婦の因縁」と類型づけており、他に「水の神の寿命」「虻と手斧」「男女の福分」と計四類型に分けて説明している。

「夫婦の因縁」についていえば、二人の男女が恐しいほどの奇縁によって結ばれるというものであるが、このモチーフは決して日本独自のものではないことも知られている。ヨーロッパには「定められた女房」の話があるし、インド、中国から極東の方にも普遍化しているモチーフなのだ。ただ日本のように運命を予知する神が、出産に立ち会う神と同じであるという例は、意外にないようである。このことが以下述べる問題点の鍵となる。

この話からは運命を予知する神霊の支配が、婚礼の段階にまで及んでいることが想像され、興味深いものがある。

つぎに婚礼の日の運命について予言する類話をあげてみよう。

ある男が漁に行き、浜辺で漂着した寄木を枕にして寝ていた。すると一人の神様がやってきて、寄木に宿っている神に、今晩村にお産がある、二人で一緒に行き運を決めてこようと誘った。すると寄木の神は、いま自分は枕にされているから行けないと断わる。しばらくして先の神が帰ってきて、生まれた子は女である、十八歳の命、だという。十八歳になると娘は隣村に嫁入りする。この日は、好天であるが、途中でにわか雨が降り岩が崩れて、その下敷きになって死ぬだろう。もし、この危難から逃れることができれば、長者となり長生きするだろうという予言があった。

その男は、女房が臨月だったので、急いでわが家に戻ると、女の子が生まれている。男は神の言葉を口外できない掟があるので、誰にもその予言を話さないで胸にしまっておいた。

さて、娘はやがて十八歳になり、隣村へ嫁入りの日がきた。父親は好天であったが蓑笠を用意して、それを持って、行列についていった。ところが予言通り、突然雨が降り出した。皆は途中の岩穴に入り、雨やどりをしようとするが、父親は、花嫁の手をとって引き出し、蓑笠をかぶらせて、そのまま無事に行列を聟方へ送ってしまう。翌日、家に帰る時、先の道を戻ってくると、雨宿りしようとした岩穴はくずれ落ちていたという。一方娘の方は、やがて長者となり百歳まで生きたというのである。

この話は、鹿児島県奄美諸島で伝承されたもので、関敬吾氏は、婚礼に死が訪れるという話はギリシア神話のアルケースティス伝説までさかのぼると指摘している。これはエウリーピデースの劇として知られるが、アドメートス王が、アルケースティスとの婚礼の後に死ぬと予言される。それを逃れるためには運命の女神モイラに代理の生贄（いけにえ）をさし出さねばならない。アルケースティスは自から犠牲を名のり出て、婚礼後、命を絶とうとする。そこでヘラクレスが、貞淑な女の死を救うため、死神を追い払い、ふたたびアルケースティスは命を得るというものだ。この場合、運命を司る女神モイラの力の強いものであることが分かるが、奄美の話では、やはり出産に立ち会った神が、婚礼の死を予言した点に注目したいのである。

結婚は、男女の不思議な運命によって決するのだが、その場合どういうわけか死の運命の影がさすのである。

糸魚川（いといがわ）市で、採集された話でつぎのようなものがある。

十月の神無月には、村中の鎮守が、出雲大社に集まり、人間たちの縁組をとり決めることになっている。ある村に、年をとっても縁に恵まれない男がいたが、自分の良縁を知ろうと、出雲の社の縁の下にもぐりこんで神々の話を盗み聞きしようとした。神々は、朝からあれこれと縁組をとり決めていく。たとえば善人と悪人、大柄な者に小柄な者、利巧な者と馬鹿な者と組み合わせていくそうだ。ところが、昼時になっても、晩飯どきになっても、隠れている男の縁談はさっぱり決まらない。神様の方もだんだん面倒になってきていい加減になってくる。いよいよ終わりの頃になってから、男の住む村の鎮守の神が、実はたった一人残っている男が、この縁の下に隠れている。この者の縁組を決めてくれと申し出た。すると神々は、どこそこの村の旦那衆の一人娘が、死んだばかり、この死人と夫婦にしようと定めた。男は、死人と夫婦など、とても嫌だ、どうしようと、がっかりしてしまう。しかし神の予言なので、夜が明けてから旦那衆の家に訪ねて行くと、ちょうど死んだ娘の葬式で、野辺送りの段階だった。男が棺のふたをあけてみると、あまりにも美しい娘だったので、思わず娘の背中をポンと叩いた。すると娘の口から餅がとび出し、娘は生き返った。この娘は、餅がのどにつまって死んだのであった。そして男は死人だった娘と、予言通り夫婦になり、一生安楽に暮したという。

関敬吾氏の指摘では、この類話は、日本には少ないらしい。しかし婚姻と死が運命的に結びついており、婚姻を媒介にして、死と再生が、人々に意識されていたことが明らかだろう。このことは人類が共通してもっていた意識であったことを思わせる。

（宮田登『神の民俗誌』に基づく）